

マーク・トウェインと「オルレアンの少女」

大 井 浩 二

ジャンヌ・ダルクといえば、イギリス軍によるオルレアンの包囲をとき、ついには百年戦争におけるフランスの勝利をもたらすにいたった聖処女、「オルレアンの少女」として、あまりにも有名である。13歳で神のお告げを聞き、祖国のために一身をささげたジャンヌの生涯は、多くの作品に取りあげられ、さまざまな解釈をほどこされてきた。マーク・トウェインの『ジャンヌ・ダルクに関する個人的回想』(Mark Twain, *Personal Recollections of Joan of Arc*, 1896) も、そうした作品の一つにちがいないのだが、この小説の形をとった伝記が一般に受けている評価を考えると、ここで論じようとする自体、いささか荷の重い作業に思えてくる。だが、この一見きわめて突然変異的で、トウェインという作家の本質からかけ離れているかにみえる作品が、じつは彼を理解するための重要な手がかりを提供しているのである。

一体、マーク・トウェインとジャンヌ・ダルクとのあいだには、因縁浅からぬものがあったといえよう。1849年、印刷所で働いていた彼のまえに、なんの偶然のいたずらか、ジャンヌに関する本の一ページがひらひらと飛んできた、と伝えられる。その一ページは、イギリス軍に捕えられて投獄された彼女の苦しみの日々を伝える部分であったのだが、それを一読したサム少年は、強く心をうたれ、はたしてジャンヌが実在の人物であったかどうかをたたくために、わが家へ駆けもどった、と伝記作家たちは記している。「40年まえに風によって播かれた種子がやっと花開く準備がととのった。彼はジャンヌ・ダルクの物語を書くことになる」と A. B. ペインは語っているが、トウェインはその物語を書くために、「オルレアンの少女」に関する文献を読みあさり、参照した文献として11冊にのぼる

書物を挙げている。トウェインはまた、73回目の誕生日に、『ジャンヌ・ダルク』は準備のために12年、執筆のために2年を費した、とも語っている。この本もまた、書きつがれるそばから、妻子のまえで朗読されたらしく、1892年から93年にかけての冬にはじめられた朗読は95年1月まで続けられたことがトウェイン自身のノートブックに記録されている⁽⁴⁾。

どうやら、『ジャンヌ・ダルク』は、トウェインが深い愛着をもっていた作品であったようで、「わたしは、わたしのすべての本のなかで、『ジャンヌ・ダルク』が一番好きです。それはたしかに最高の作であり、わたしはそのことを十二分に知っています」と述べ、ある人にあてた手紙（1895年1月）のなかで、「おそらく、この本は売れないでしょうが、それはどうでもいいことです——それは愛のために書かれたのですから」とさえ言い切っている。彼の忠実な伝記作者ペインも、この作品を「マーク・トウェインの至高の文学的表現」と形容しているけれども、最近の評言は概して否定的であるといわざるを得ない。アルバート・E. ストーンは「このロマンスは一般に、奇異な作品とみなされてきた。たぶん、その理由で、それはトウェインの主要な小説のなかで、もっとも知られず、もっとも読まれない作品となっている」と述べているし、H. N. スミスは『ジャンヌ・ダルク』には「女性の純潔に対する極度に因習的な姿勢」がみられ、「古めかしいセンチメンタリティの発露」がうかがわれる、としか語っていない。ジェイムズ・M. コックスは、『ジャンヌ・ダルク』の連載がおわるまで、トウェインの作であることが伏せられていたという事実注目して、そこに「彼のユーモアの精神の、ほとんど全面的な否定」を読みとり、「マーク・トウェインは彼の作家としてのアイデンティティを否定していた」という理由で、『ジャンヌ・ダルク』を失敗作と断じている。この本がトウェインの「文学の忠告者および監修者」としての妻オリヴィアに捧げられているという事実そのものが、彼のユーモア精神の否定のなによりの証拠である、とコックスは論じていた⁽⁵⁾。トウェインの親友 W. D. ハウエルズは、作者の大真面目な態度にとまどったのか、「世紀の大ユーモア作家の、この奇妙な書物」⁽⁶⁾ という表現を用いていた。一体、トウェインは、

ジャンヌ・ダルクのどこに魅きつけられて、このような「奇妙な書物」をものしたというのだろうか。

もちろん、ジャンヌに対する関心は、トウェイン個人だけのものではなく、すでに1840年ごろから一般にうかがわれるようになっていた、という事情を見落すことはできない。トウェインの参考文献リストに挙がっている J. E. J. キシュラの書物は1841年に出版され、やはり彼が参照した J. ミシュレの本が英訳されて、アメリカで出版されたのが1845年であった。そのほかにも、フランス本国はもとより、イギリスやアメリカでもジャンヌ・ダルクに関する書物が相ついで出版され、人びとの注目を集めていたことは、たとえば、時代に背をむけた生活を送っていたアマーストの エミリー・ディキンソンのような詩人までもが「オルレアン少女」に関する短詩を1861年に書いていることから察しがつくだろう。あるいはまた、13歳になるトウェインの娘 スージーがシラーの『オルレアン少女』（1801）を母親に読んできかせたという記事が、母親オリヴィアの日記（1885年7月2日）に残されていることも、ジャンヌの復活ぶりを物語っているといえよう⁶⁴。いずれにせよ、トウェインが『ジャンヌ・ダルク』を書くにいたったについては、時代の雰囲気も大いに働いていたと考えなければなるまい。だが、そのことはけっして、彼が独自のユーモア精神を放棄しなければならないということを意味しない。いつものトウェインなら、ジャンヌを材料にして、ヨーロッパの社会やカトリック教国フランスを笑いのめす機会を見つけることもできたのではなかったか。「大ユーモア作家」としてのマーク・トウェインがユーモア精神を否定してまでもジャンヌ・ダルクの伝記を書こうとしたのはなぜか、という問題は、それが失敗作かどうかという問題とは別に、やはり考えてみなければならないだろう。

『ジャンヌ・ダルク』は「個人的回想」であることを強調しているけれども、それはもちろん、トウェイン自身の「個人的回想」を意味しているのではない。そのことは、この本の正確な題名が *Personal Recollections of Joan of Arc, by the Sieur Louis de Conte (her Page and Secretary) Freely Translated out of the Ancient French into Modern English from the Original Unpublished*

Manuscript in the National Archives of France by Jean François Alden となっていることから明らかである。つまり、ジャンヌの「小姓」で「秘書」でもあったルイ・ド・コントなる人物が書いた「個人的回想」が原稿の形でフランス国立資料館に残されていたのを、ジャン・フランソワ・アルダンなる人物が英訳したというわけで、トゥエインの名前はどこにも出てこない。このようにして用意された二重三重の複雑な仕掛けによって、コックス流に言えばトゥエインの「ユーモア精神」の全面的な否定がなされているといえよう。と同時にまた、トゥエインは作品のなかで「語り手」として登場する一方、「訳者」としても姿を見せることになっている、と考えることもできる。この作品におけるトゥエインは、完全に姿をひそめているかに見えながら、ジャンヌの回想にふけるトゥエインと、その「個人的回想」を翻訳しているトゥエインの二人がかりで、「オルレアンの少女」の生活と意見を浮かびあがらせようとしている、という見方もできるのではないか。問題は、その「語り手」と「訳者」がジャンヌをどう眺めていたか、ということにならざるを得ない。

では、ルイ・ド・コントとは、一体何者なのか。この人物はジャンヌと同じ村に育ち、彼女と子供時代をともに過ごしただけでなく、1410年1月6日生まれで、1412年1月6日生まれのジャンヌのちょうど2歳年上であったことも明らかにされている。彼は6歳のときに、彼女の生まれたドムレミイの村に移り住むことになったのである。したがって、ド・コントは、ジャンヌの少女時代をよく知っているだけでなく、無学で読み書きのできなかった彼女のそばに仕えていたのだから（投獄されたあとの彼女に接する機会にも恵まれていた）、彼女のすべてを知りつくしている、信頼できる「語り手」になっているといえよう。しかも、この人物はトゥエインが作り出した虚構の人物ではなく、実際にジャンヌの生涯に姿を見せる実在の人物であった。この「小姓」兼「秘書」のことを、トゥエインは主としてミシュレの書物から学んだらしいが⁹⁾、最近の研究書によると、王子シャルルとジャンヌがシノンで対面したときに、王子からあたえられた「小姓」がルイ・ド・コント（この研究書では Louis de Coutes と綴られている）であっ

たようなので、この人物がジャンヌの幼な友達であったかどうかは疑わしい⁽⁶⁾。この部分はあるいはトウェインの創作であるとしても、とにかく実在の人物に一人称で語らせることによって、作者はジャンヌに対する個人的な意見や感情をじかに表現することができたことはたしかである。

1年2年、10年20年と歳月が過ぎ去って、フランスの戦雲たちこめた夜空を驚くべき子供が彗星のように駆けぬけたあと、火刑柱の煙のなかに消滅して行った光景が過去の奥底へと遠のき、さらにますます奇妙で、不思議で、神聖で、感動的になってゆくにつれて、わたしはやっと彼女の本当の姿を——唯一無二の絶対者だけは別として、この世に生を享けたもつとも高貴な生命を理解し、認識するようになった。

この「語り手」にとって、ジャンヌはまさに美德の権化、汚れを知らぬ純潔そのものの理想的存在にほかならない。聖ミカエルと二人の聖女マルグリットとカトリヌに迎えられ、天の声を聞いた彼女、シャルル王子と感激の対面をはたした彼女、オルレアンを解放することに成功した彼女、あるいは長いあいだ獄につながれたあと、異端の宣告を受けて、1413年5月30日に火刑に処せられた彼女——要するに、ジャンヌの19年の短い生涯は、「語り手」の思い出のなかにいつまでも生きつづける。そして、ジャンヌについて語る彼の言葉のすべては、彼女の賛美と美化に捧げられているといっても過言ではあるまい。

ジャンヌ・ダルクを知ることは、まさに野の花のように、まったく高貴で、純粹で、忠実で、勇敢で、同情的で、寛大で、敬虔で、非利己的で、慎しみぶかくて、清廉潔白な人物——立派で美しい性質、この上なく偉大な人格を知ることであった。

こうして、読者の頭のなかには、19歳で刑場に散った「率直」で、「子供のような」ジャンヌ・ダルクのイメージが永遠の瞬間に固定されることになるのである。

この本のなかで、ジャンヌがたえず「子供」のイメージで捉えられていることは、やはり見過ごせない意味をもっているように思われる。10代の後半の女性を「子供」とみなすのは、いささか異常ではないのか。「語り手」自身、「彼女は

若々しい輝きと美と魅力のすばらしいヴィジョン、勇気と生命と精気のすばらしい権化であった！彼女は日ごとに理想的な美しがいやましていた……——それは成熟の日々であった。というのも、彼女は今では、17歳をずっとすぎていた——いや、彼女は17歳と6ヶ月になろうとしていた——事実、ちょっとした娘（a little woman）になっていたと言ってもよい」と述べている。にもかかわらず、ジャンヌが「このすばらしい子供」といった呼び方をされているのは、そうすることによって、彼女の「聖処女」性が強調されることになるからであった、と考えていい。ジャンヌが最初に紹介されたとき、彼女はもちろん、ただの「少女」としてであったし、神の声を聞いたときにも、彼女はみずからを「少女」と呼んでいた。その後も、彼女を語るにあたっては、つねに“child”あるいは“girl”という単語がくり返し用いられている。オルレアンの囲みをといた日にも、「あらゆる歴史において、いかなるほかの少女も、ジャンヌ・ダルクがその日に達した栄光の高みに達したことはなかった」と書かれ、「彼女は、疲れた子供のように、そのままベッドにはいって眠った」（強調はいずれも引用者）と説明されている。

こうして、ジャンヌの「少女」性が明らかにされるにつれて、彼女が一切の性的な要素を欠いた人物として捉えられていることを読者は認めざるを得なくなってくる。この点について、トウェインが典拠としていたミシュレは、ドムレミイの村の女性たちの証言に基づいて、ジャンヌには生理がなかったことを指摘し、「彼女は魂も肉体も子供のままでいるという聖なる権利をもっていた。彼女は強く美しく成長したが、女性につきまとう肉体の苦勞を知らなかった」と書いている。トウェインは、彼の手もとにあるミシュレ本のこの箇所の欄外に、「より高い生活が彼女を夢中にさせ、彼女の肉体的（性的）な発達を抑止した」と記している。最近のマリーナ・ウォーナーもまた、ミシュレを引用しながら、「一方において、ジャンヌは性的特徴を十二分に備えた、まったくの女性で、誘惑的で、美貌でさえあるが、他方また、彼女は、そうした特徴の通常の結果をすべて否定して、思春期以前の処女の状態にとどまっている」と説明し「女性であって、それでいて女性特有の月経をもたないことは、原初の状態、性の知識によって墮落

する以前のイヴの状態にとどまることである」とも論じている。トウェインにとって、「フランスの解放者」はどうしても「オルレ안의少女」でなければならなかったのである。

ここで興味ぶかいのは、「大昔から、ドムレミイの村で育った子供たちはすべて『樹の子供たち』と呼ばれていた」という事実ではないだろうか。この村の「一面を草に覆われた素晴らしい、広々とした空地」に、大きく枝をひろげ、緑陰を楽しむことのできる「この上なく堂々としたカバの木」が立っていて、そのそばには「澄みきった泉」があって、「つめたい水」がわき出していた。その大木には妖精たちが棲みつき、そこへ遊びにやってくる村の子供たちと妖精たちとのあいだには「この上なく暖かい愛情と、この上なく完全な信頼」しか存在しなかった、と伝えられている。村の子供たちはまた、この「妖精の樹」のまわりで手をつないで踊りながら、「樹の歌」を歌ったのだが、ジャンヌも、その踊ったり歌ったりした子供たちの一人であったことは言うまでもない。ジャンヌがはじめて聖ミカエルの訪れを受けたのも、この「妖精の樹」のもとであった。この物語の重要な場面のいたるところで、「妖精の樹」や「樹の歌」への言及がなされているのも、きわめて当然のことといえよう。

「語り手」の伝えるところによると、「妖精の樹」に棲みついていた妖精たちは、村の司祭の手によって追放させられてしまう。そのため、その後の子供たちの生活において、「妖精の樹」はかつてのような意味をもつことができなくなる。「妖精たちの加護を失ってしまって、泉はその新鮮さと冷たさのほとんどを失ってしまった」と「語り手」は述べている。だが、この「妖精の樹」が『ジャンヌ・ダルク』において、一貫して無垢な子供の世界のシンボルになっていることには変わらない。ランスにおけるシャルル国王の戴冠式のあとで催された晩餐会の席上、大広間の一隅から「きわめて優しく、甘く、ゆたかな音調」で、「わたしたちのなつかしい、素朴な歌」が聞こえてきたことを、「語り手」は回想しているのだが、そのときジャンヌの反応はどうであったか。「その途端、ジャンヌは崩れ伏して、両腕に顔を埋めて泣いた」ばかりでなく、「一瞬のうちに、まわり

の華麗な壮観は消え去ってしまい、彼女は再び、彼女の周囲にひろがる静かな牧草地で、羊の世話をする小さな子供にもどっていたし、戦争も負傷も血も死も戦闘の狂気も混乱もすべてが夢と化していた」（強調は引用者）のである。「妖精の樹」は日常的な時間と変化を超越した、無垢な子供の領域をさし示す機能を果たしていると言い切ってもよい。

この「妖精の樹」については、トウェインの参照した研究書のいずれもが言及しているのだが、子供たちの歌う「樹の歌」は、まったく「トウェインの創作」であった、とストーンは書き、「妖精の樹と歌は、ジャンヌ・ダルク伝説への、トウェインのきわめて顕著な貢献となっている」と指摘している⁹⁾。もちろん、トウェインが「妖精の樹」のエピソードにかなり枚数を費し、「樹の歌」までも創作するにいたったのは、この「樹」や「歌」がジャンヌの生活と意見を端的に表わしていると考えたからにはほかならない。すでに明らかのように、それらはジャンヌの子供時代と密接に結びつき、「静かな牧草地」で「羊の世話をする小さな子供」としてのジャンヌ、自然の子としての彼女のイメージを読者に植えつける働きをはたしている。「妖精の樹は子供時代、幸福、自然とのハーモニー、過去を象徴している。……妖精の樹は、ジャンヌの自然との一体感の護符である」とストーンは書き、このストーンの解釈を支持する S. K. ハリスが「妖精が棲みついているかぎり、その樹は墮落した世界のただ中にある小さなエデンの土地として機能している」¹⁰⁾と述べているのは、きわめて当然のことといえよう。トウェインは「妖精の樹」をめぐるエピソードをいくつか導入することによって、ジャンヌが「光と空気と友情にあふれた顔の激励」と切りはなせない自然の子であったことを、彼女が「生まれながらの太陽の子であり、小鳥の、すべての幸せな自由な生き物たちの本来の仲間」であったことを、そして、彼女がエデン的な「妖精の樹」のもとでたわむれる、墮落以前のイヴ的な「少女」であったことを、読者に強く印象づけているのである。

だが、こう書き立ててくると、「語り手」ド・コントはあまりにもジャンヌのイヴ的性格にこだわりすぎている、という非難を招くことになるかもしれない。

たとえば、S. K. ハリスは「一人称の語り手は彼女を聖女という観点以外の観点から考えていない。ジャンヌを『ユニーク』とか『無欠』と見る彼は、彼女の謎を見とおすことができず、したがって、彼女の精神の旅のドラマを再構成することに失敗している」⁴⁰と論じている。たしかに、ハリスの指摘するように、「語り手」のジャンヌ観は一面的にすぎるかもしれないが、読者としては、彼女の「聖女」的側面を語りつづけてやまない「語り手」が、いまや82歳という高令で、すっかり老いさらばえているという、きわめてアイロニカルな事実を見落としてはならない。ジャンヌより2歳年上の「語り手」は、彼女の栄光と悲惨のすべてを見とどけ、彼女が火刑に処せられた1431年以後も生きつづけた。ジャンヌが19歳で生涯を閉じることにより、その若さと純粋さを永遠に保ちつづけることができたのと対照的に、この「語り手」は心ならずも地上に生きながらえ、82歳になった今、ジャンヌの物語を「彼の甥や姪の曾孫たち」に語っているという設定である。当然、老人としての「語り手」は、「やれ、やれ、なんという昔になったことか！ わしも、あの頃は若かったわい」とか、「さてと——どこまで話したかな？ 年をとると、頭があちらこちらへと動きまわるわい」とかいった言葉をくり返し、「わしはいやというほど年をとってしまった」というのが、この人物の口ぐせになっている。

こうして、読者は生きながらえた老人の話に耳を傾けながら、彼自身の生い立ちや現在の状況に立ちいたった経緯などについて、たつぷりと聞かされることになる。その意味で、「語り手」はジャンヌを口実にして、せっせと「私語り」にいそしんでいると考えることもできるだろう。だが、長々としゃべりつづける、現世の時間に翻弄された「老人」と、処女のままで刑場に散った「オルレアン少女」との見事なコントラストに、読者としては目をとめることを忘れてはならない。「語り手」にジャンヌを「聖女という観点」からのみ眺めさせることを、作者トウェインは目論んでいたのではないか。この年老いた「語り手」の存在は、ジャンヌの「聖処女」性を浮かびあがらせるための、きわめて効果的な戦略であった、とここであえて主張しておきたい。

わたしはジャンヌ・ダルク、一つの点で肩を並べ得る者が現在も未来も存在しないであろう、あの素晴らしい子供、あの崇高な個性、あの精神の物語を語りおえた——その一つの点とは、利己主義、私利私欲、個人的野心といった一切の混ざりものとは無縁の純粋さという点である。この人物には、どのように探し求めても、こうした動機の痕跡さえも見出されないし、こうしたことは、その名前が俗悪な歴史に現われる他のいかなる人物にも言い得ないことである。

こう断言する「語り手」にとって、ジャンヌは「俗悪」な現実世界にあって、つねに自己放棄に徹し切っていった「純粋さ」そのものであった。「あの時間と腐敗とは無縁なイメージが生涯、わたしとともに残っている」と語る年老いた人物を登場させることによって、トウェインは「汚点のない」、「完璧な」性格をもった「フランスの解放者」の姿をさし示すことに成功しているのである。

こう考えてきてはじめて、読者は純粋な少女としての「フランスの解放者」を、トウェインの同時代のアメリカ大衆作家たちにおける無垢な子供たちの系譜に位置づけることができる。たとえば、『ジャンヌ・ダルク』の4年後に出版される『オズの魔法使い』(L. F. Baum, *The Wonderful Wizard of Oz*, 1900)に登場するドロシー、その続篇のいくつかの「オズもの」に姿を見せるオズマ姫、F. H. バーネット女史の『秘密の花園』(F. H. Burnett, *The Secret Garden*, 1911)のメアリー、『小公子』(*Little Lord Fauntleroy*, 1886)の少年セドリックも思春期以前の子供という意味で、その仲間に加えていい)、さらにはまた、『ハックルベリー・フィンの冒険』(*Adventures of Huckleberry Finn*)のイギリス版と同じ年に英訳が刊行されて、人気を博することになった『ハイジ』(Johanna Spyri, *Heidi*, 1800)の女主人公などは、いずれもジャンヌ・ダルク的な純粋無垢の少女ばかりであった⁶⁰。ジャンヌの「処女性」と「少女的な性の欠如」に注目したジャクソン・リアーズは、「ジャンヌの性的な未成熟と早世は、彼女を19世紀の聖人伝に登場するほかの人物たちに結びつけた」と書き、ジャンヌのような聖女はヴィクトリア朝の小説に登場する子供たち、つまり「永久に彼らの無垢を保ったまま、若さと純潔のうちに死んで行く子供たち」に類似していることを指摘したあと、「彼らの共通の運命は、子供時代のイメージが——中世であれ

現代であれ——大人の道徳的、性的な不安からの代替的な逃避を提供できることを暗示している」¹⁰⁰と論じている。

だが、さきに挙げたドロシーやオズマ姫やハイジなどは、ただ単に「大人の道徳的、性的な不安」から逃避しようとしているだけではない。この思春期以前の少女たちは、そのような消極的な可能性を暗示しているだけでなく、もっと積極的かつ活動的な役割をはたしていると考えられる。彼女らはいずれも、ジャンヌ・ダルクがそうであったように、つねに世の中の悪と対決し、それを地上から追放したあとに平和と秩序を導入するという使命をはたしている。たとえば、『ハイジ』においては、「アルプスの少女」ハイジの無私な努力によって、彼女をとりまく多くの人びとに幸福と希望がもたらされる。この少女については、「彼女はアルプスのエデンの救済者的能力を、彼女の出会いすべての人に伝える。……この非利己的な救済者は、性的な意識を一切欠いていて、エデン的な幸福が回復され、だれもかれもがずっと幸せに暮すことになる、すばらしい解決を可能にする」¹⁰¹という意見が聞かれる。アルプスのエデン的世界に住むハイジは、まさに「無垢な救済者」にはかならないが、その意味では「妖精の樹」のそびえ立つドムレミイのエデン的環境に育ったジャンヌ・ダルクもまた、フランスを国難から救った「無垢な救済者」と呼ばれるにふさわしい。「アルプスの少女」と「オルレアン」の少女」は、一卵性双生児の姉妹といってもよいほどに似かよっているのではあるまいか。

もちろん、ハイジのような「無垢な救済者」たちが数多く登場してきた背景には、世紀転換期のアメリカがかつての「丘の上の町」であることをやめ、「金びか時代」の現実にかがわれるような腐敗と混乱にみちた危機的状況に直面していたという事実があったことを見逃すことはできない。「アルプスの少女」がアメリカ大衆に爆発的な人気を呼んだのは、失われたアメリカの自然に対する強いノスタルジアがあったためであり、アルプスの美しい自然のなかで救済者的能力を発揮するハイジは新しいアメリカの可能性を暗示する存在となった、と考えていいだろう。「アルプスの少女」と同じく、「オルレアン」の少女」もまた、そ

のようなアメリカの危機的な状況の産物として捉えることができるのではないだろうか。だが、15世紀フランスに登場したジャンヌを、19世紀末のアメリカ、いや、アメリカそのものと結びつけることに対しては、強い疑問を感じる読者も多いにちがいない。一体、『ジャンヌ・ダルク』のどこにアメリカへの直接的な言及がなされているのか、という声さえ聞かれるかもしれない。

ここで、疑いぶかい読者は、『ジャンヌ・ダルク』が「今年は1492年。わたしは82歳である」という「語り手」の言葉ではじまっていたことを思い出さなければならぬ。「語り手」は彼の個人的回想をいつ何歳のときにはじめてもよかったし、ジャンヌを十分な時間的距離を置いて眺められるだけの歳月が経っておりさえすれば、いつ語り出しても問題はなかったはずである。したがって、彼がその回想記を1492年というアメリカ大陸の「発見」の年に綴りはじめたという設定は、「無垢な救済者」ジャンヌ・ダルクをアメリカと結びつけようという意図がトウェインの側に働いていたことを暗示しているといえるのではないか。この年、ヨーロッパのまえに忽然と出現したアメリカ大陸は、人類が歴史の重荷から解放され、無限の可能性を追求することのできる空間としての意味をもっていた。だが、こうした人類の夢をになって登場したはずの新世界アメリカは、「発見」から400年たった1892年ごろ、つまり『ジャンヌ・ダルク』が書きはじめられた時点では、すでに西なるフロンティアを失い、人類の再生の場としての空間であることをやめていた。

こうした事情は、やはり『ジャンヌ・ダルク』の書きつがれていた1893年に歴史家 F. J. ターナーが「アメリカ史におけるフロンティアの意義」(F. J. Turner, "The Significance of the Frontier in American History")と題する論文を発表して、世紀末アメリカの危機的状況に光を当てていたことから容易に理解することができる。マーク・トウェイン自身、『ハックルベリー・フィンの冒険』において、ミシシッピ河によって象徴されるアメリカの自然がもはやかつての意味を失ったことを明らかにすると同時に、『アーサー王の宮廷におけるコネティカット生まれのヤンキー』(A Connecticut Yankee in King Arthur's Court,

1889)では、都市や産業に新しい可能性を見出そうとする革新主義的イデオロギーを先取りして、それに断固たる否！の声を浴びせかけていた。アメリカ人はフロンティアとしての自然に逃れることもできず、さりとて都市に新しいフロンティアを発見することもできないというのが、『ジャンヌ・ダルク』執筆の時点におけるトウェインの認識であったといえよう。とすれば、こうしたアメリカの現実に対する強い幻滅が彼に「無垢な救済者」としてのジャンヌ・ダルクに向かわせることになった、と考えられないだろうか。トウェインがリアリストであることをやめて、あえて『ジャンヌ・ダルク』のようなロマンス的作品を大真面目に書きあげたのは、彼における強烈な危機意識のゆえであった、と主張したいのである。

すでにふれたように、この本におけるトウェインは、「語り手」であると同時に「訳者」でもあった。彼は、その冒頭に「訳者はしがき」をつけて、そこでもまた、ジャンヌがいかに「ユニークな」存在であったかに触れ、彼女の「性格」がいかなる基準で判断しても「やはり無欠であり、やはり理想的に完璧であって、人間が達成することのできる最高の地位を占めている」と、やがて「語り手」が主張することになる点に読者の注意をうながしている。「訳者」はまた、「彼女はおそらく、その名前が俗悪な歴史に位置を占める、唯一の完全に非利己的な人間であった」と書いているが、この「俗悪な歴史」という表現を、「語り手」もまた用いていたことは、すでに指摘しておいた。「年令的にはただの子供」で、「貧しい村の少女」(強調はいずれも引用者)であるジャンヌが「鎖にしばられたまま横たわっている大国」に救いの手をさしのべ、ついに「フランスの解放者」となったという事実を、「訳者」は高く評価して、「彼女はこの国、この死体に手をふれた。すると、それは立ちあがって、彼女のあとにつき従った」と書いている。この死者をよみ返らせたジャンヌというイメージは、キリストへの言及を含んでいると考えられるので、「訳者」もまた、「語り手」と同じく、彼女のことを「救済者」、しかも大文字の「救済者」とみなしていたと言えるのではないか。R. B. サロモンはジャンヌを「キリスト的人物」と呼び、「墮落していない

人間の権化——人間ではない、スーパーヒューマンな子供⁶⁰と規定しているが、ここでハイジ的な「無垢な救済者」もまた、「スーパーヒューマンな子供」であったことを思い出すべきだろう。どうやら、「訳者」トウェインは、「語り手」の文章を翻訳するという形で、ジャンヌ・ダルクという「無垢な救済者」を、15世紀のフランスから19世紀末のアメリカに“translate”しようとしているのではないか。そこにもまた、世紀末アメリカの危機から脱出する道を夢みているマーク・トウェインの姿勢が露呈しているといわねばなるまい。

とはいえ、「フランスの解放者」としてのジャンヌ・ダルクは、結局は人類の救済者とはなり得なかった。長い異端裁判のあと、死刑執行人に引き渡されたジャンヌの運命は、彼女がまったく無力な人間にすぎなかったことを示している。R. B. サロモンは『ジャンヌ・ダルク』を「ペシミズムの濃い作品」と呼び、「それは無垢の存在と力の肯定であるとしても、それはまた、無垢に対する裏切りの痛烈な記録でもある」と語っている。D. W. ノーブルによると、「トウェインのジャンヌ発見は、彼を絶望から救うことができず、暗黒のなかに投げこむばかりであった」が、それは「ジャンヌが封建的なヨーロッパの制度の力を打ち負かすことができて、人間の心のなかの悪を打破しきれなかった」からである、と考えられる⁶¹。いずれにせよ、ジャンヌは現実には世紀末アメリカの危機を解決することのできない「無垢な救済者」であったことは否定できない。

にもかかわらず、トウェインが『ジャンヌ・ダルク』を書きあげたのは、彼がアメリカを自然とのハーモニーの状態にある世界とみなすパラダイムにこだわりつづけていたことを雄弁に物語っている。アルバート・E. ストーンは例の「妖精の樹」を「15世紀におけるジャクソン・アイランドの一種」⁶²と呼んでいたが、それはミシシッピ河とともに、トウェインにとって、「丘の上の町」としてのアメリカというパラダイムが確保される場を象徴していた。トウェインがジャンヌ・ダルクの小説的伝記を書いたのは、アメリカをもう一度、人類が再生できる自然の状態にもどしたいという願望のゆえであったといえるだろう。「アメリカの解放者」を待ちわびる想いがトウェインという「大ユーモア作家」に『ジャンヌ・

ダルク』という「奇妙な書物」の筆をとらせることになった、と考えたいのである。

〔本稿は『現代英語教育』1985年12月号掲載の小文を大幅に書き改めたものであることをお断わりしておく。〕

註

- (1) 『ジャンヌ・ダルク』執筆の事情などについては、Albert E. Stone, Jr., *The Innocent Eye: Childhood in Mark Twain's Imagination* (Yale U. P., 1961), pp. 202-27; James M. Cox, *Mark Twain: The Fate of Humor* (Princeton U. P., 1966), pp. 247-66 参照。
- (2) Stone, p. 204; H. N. Smith, *Mark Twain: The Development of a Writer* ([1962], Atheneum, 1967), pp. 10, 185; Cox, pp. 247, 260.
- (3) W. D. Howells, *Mark Twain: Reminiscences and Criticisms* ([1910], Louisiana State U. P., 1967), p. 134.
- (4) Stone, pp. 205-6.
- (5) Stone, p. 211 note 15.
- (6) Marina Warner, *Joan of Arc: The Image of Female Heroism* ([1981], Penguin Books, 1983), p. 77.
- (7) Stone, p. 209; Warner, pp. 39, 41.
- (8) Stone, pp. 222-3. なお、この「樹の歌」の最後の3行は “And when in exile wand’ring we/Shall fainting yearn for glimpse of thee,/O rise upon our sight.” となっている。
- (9) Stone, p. 223; Susan K. Harris, *Mark Twain's Escape from Time: A Study of Patterns and Images* (U. of Missouri P., 1982), p. 20.
- (10) Harris, p. 14.
- (11) 拙論「F. H. バーネットと『金びか時代』」(『論攷』第55号) および拙著『フロンティアのゆくえ——世紀末アメリカの危機と想像』(開文社, 1985年), pp. 162-181 参照。
- (12) T. J. Jackson Lears, *No Place of Grace: Antimodernism and the Transformation of American Culture, 1880-1920* (Pantheon Books, 1981), p. 151.
- (13) Robert Jewett and J. S. Lawrence, *The American Monomyth* (Anchor Press, 1977), p. 116.
- (14) R. B. Salomon, *Twain and the Image of History* (Yale U. P., 1961), p. 187.

- (15) Salomon, p. 187; D. W. Noble, *The Eternal Adam and the New World Garden: The Central Myth in the American Novel Since 1830* (George Braziller, 1971), p. 65.
- (16) Stone, p. 227.